

もらった花が枯れた。と言って、すべてが枯れた訳じゃない。「ヒミコ」というプレートが土に刺さっているが、品種の名前なのか花そのものの種類なのか分らない。私は無知だ。そんなこと知っている。

窓際において、水をやったのは何日前だろう。あの子にももらった。花屋の息子だと言う。だからか、優しい。親の職業が子に及ぼす影響はあるのだろうか。私はお父さんの仕事さえ詳しくは分らない。私は「いいの」と訊いた。凄く欲しかったががめついと思われてはまずいので遠慮勝ちにだ。「大丈夫」彼は笑った。花の咲くような笑顔。「ちやんと父親にも許可もらって来たから」花のように、太陽が似合う笑顔。

彼は育てるに当たっての注意点や、これから花が咲いて美しくなることなど教えてくれた。「ぼくはこの花が好きでね」今迄見たことのない顔で話しはいつまでも続いた。小ぶりではあるけれど植木の花は重く、学校から持って帰るには骨が折れた。しかしその重さは嬉しみにもなった。

今日は嫌なことがあっただけだ。そう大げさなものでもなく、先生から「こんなのも分らないのか」と言われたり友達が「あの子そういうところあるよね」と私の話しをしているのを聞いて仕舞った丈だ。私は花が枯れたのを知った。一日に一度の水やりは少しずつ間隔が空き、花を眺めることもしなくなった。あの子に好きな子がいるのを知った。だから、腹いせに、お前を枯らした訳じゃないと私は自分と花とに語り掛ける。

ほんの少し、嫌なことがあっただけだ。幅が狭く、少し堅くて厚みのある、緑の濃い葉を撫でる。枯れて落ちた花は、ごみ箱に捨ててもいいものか迷う。今日は天気がいい。窓際に置いた花の葉の、緑が光を受けて輝やく。お前は枯れてもなお美しくい。私は葉を撫でた。すべらかな緑の葉は、花よりも確かだ、まだ枯れていない。